

第5講：15 「この物種は」

「神一条」と「道一条」

「道一条」という表現があるが『改訂天理教事典』では「他の職業につくことなく、何等かの形で天理教の救済活動に専従する」と定義されており、日常的に「道専務」といった状態を指している。その一方で「神一条」という表現もある。こちらは、「親神に向かってひとすじに」と人間が行為の主体である場合と、「親神からひとすじに」と神が行為の主体であるとの二通りある（同上書）とある。

人間が主体となっている一つ目の定義は、「道一条」と通底しているが、「他の職業につくことなく」といった表現はなく、いかなる場面においても親神に対してひとすじということから、そこには世間で、どのような立場や仕事といった次元を越えた心の状態を示しているように思われる。言い換えるなら、たとえ直接にお道と関係のない社会で仕事をしていても、「神一条」で通ることの可能性、またその大切さを教えられているとも考えられる。逸話の中で忠七に言われた教祖の「神の道について来るのに、物に不自由になると思い、心配するであろう」というお言葉は、そうした道の御用と世間の御用との「両立」に関するところにあつたのではないだろうか？

今日、この道を通る多くの人たちが、先の定義によると「道一条」ではなく、社会で仕事を持ちながら、この道の信仰を続けている。もっとも、視点を変えてみれば、「道一条」で通っている専務者も、社会的にみれば「教会長」や「布教所長」といった「道専務者」も、「伝道師」や「宗教家」という社会的肩書きがあり、それは一つの「職業」と見なされ、共に社会を構成する一員でもある。

お道の御用を専務にしたいが、さまざまな理由によって社会の中で仕事を持つことを、特別な意味を込めて「事情働き」という表現を用いることがある。この表現には「道一条」で通りたいが、何らかの必要に迫られて収入を得るような意味合いが強い。そういう意味で捉えられたら、貧のどん底の中でその日食べる米がない状態で過ごされていた教祖が、仕立物や糸紡ぎに精を出され、あるいは秀司が紋付きを着て青菜を売られたことも、立派な「事情働き」であつたと言えるだろう。

しかし、今日我々が表現するような「事情働き」といった意味で、このようなひながたを残されたとは思えない。むしろ、このひながたは、世間で働くこととお道を通ることが、相反しないことであるとも解釈できるのではないだろうか。言い換えるなら、「世間で働くこと」と「信仰をすること」には境界はなく、一つの連続したものとしてとらえることを教えられているようにも受け取れる。それが「二つ一つ」の表現で教えられることではないだろうか。

「二つ一つ」

二つ一つとは、「おかきさげ」に出てくる表現である。

「又一つ、第一の理を論そう。第一には、所々に手本雛形。論す事情の理の台には、日々という、日々には家業という、これが第一。又一つ、内々互いへ孝心の道、これが第一。二つ一つが天の理と論し置こう。」（「おかきさげ」）

つまり、めいめいの家業を大切にすることが第一であるとともに、おさづけの理を頂いた者はよふぼくとしての一つの新たな

な使命を授かったのだから、家業ではないが、それにまさる尊い使命であり、これを大切にすることは言うまでもなく、この両方を合わせて第一である。親孝心ということと家業大切ということとは、二つ一つなんだと教えられる。

『改訂天理教事典』には、「二つまたは幾つかの事柄が、例えば誠の心のような人間の精神とか、または親神の守護によって、一つに治まること、あるいは、両立し難いものでも両立し得る道があり、それが天の理すなわち親神の守護であるということ」とある。つまり、世間一般の仕事と道の御用とは、決して相反するものではなくて、この二つが単に「両立」ということだけでなく、その違いを超越する、その境界を取り除くことによって、日常の生活を通じて「国々所々の手本雛形」になるための道筋があるのではないだろうか。

日々ものだね

このように毎日の生活の中で、世間の中でどっぷり身を置きながらも教えに基づいた信仰の姿、誠真実の姿が、「ものだね」として、親神に受け取っていただける。「みかぐらうた」に、「ふうふそろうてひのきしん これがだいゝちものだねや」（11-2）とある。ひのきしんは「日の寄進」であり、親神の守護によって日々生かされていることの感謝の行動である。したがって、特別な時にだけ行うものではなく、普段の生活の中での実践が求められる。三信条として掲げられている「神一条の精神」と「ひのきしんの態度」「一手一つの和」は、日頃の生活から離れた特別な空間、例えば行事やイベント、大会といったものだけでなく、毎日の生活の中で実践することにその意義がある。信仰に基づいた日々の姿勢が「ものだね」として受け取られ、あらゆる物事の根源となっていくのだと教えられる。この物事の根源こそが、たすけの源であり、陽気ぐらし世界建設に向けての原動力になっていくのだろう。

また「おふでさき」の号外では、

にちへに心つくしたものだねを

神がたしかにうけとりている

しんぢつに神のうけとるものだねわ

いつになりてもくさるめわなし

たんへとこのものだねがはへたなら

これまつだいのこふきなるそや

とも教えられ、毎日の生活で心を尽くすとは、神一条で通ることであり、それは人をたすける心でもある。それが物種となれば、神がしっかりと受け取り、いつまでも腐ることもはなく、末代のものとなる。逸話の中で山中忠七に授けられた「永代の物種」は「確かな証拠」として、これを具体的な形として見せられ、道を通る人たちの不安を取り除き、励みを与えて下さつていとも考えられる。

教祖が貧のどん底の中を通られていた時、山中忠七は毎日一升の米を担いでお屋敷に通われていたという。それを毎日心待ちにされていたこかん様を見て「それだけ喜ばれるのなら、いっそ五斗俵を持ってこよう」と考えたが、教祖は「毎日毎日、こうして運んでくれるのが結構やで。」と言われている。ものだねと言うものは、毎日の繰り返しが最も大切なのだと教えられている。